

『正義派』について

福田 金光

On *Seigihha*

Kanemitsu FUKUTA

はじめに

志賀直哉自身の「創作余談」に、

〈「正義派」車夫の話から材料を得て書いたもので、短篇らしい短篇として愛してゐる。¹⁾〉とある。続いて「出来事」のところに、志賀は、

〈「正義派」は正義の支持者といふ誇りを自ら段々誇張さして行つて、しかもそれが報ひられない所から来る淋しさを主題としたが、……〉

と記し、また、昭和32年の〈映画「正義派」原作者の言葉〉の中にも、

〈私は「正義派」のテーマである、自ら正義を擔ふと自負して行動した人間が、後で何んともなくむくはれない気がして、淋しくなるといふ点をしつかり攔んで作つて貰ひたいといひ、²⁾〉と述べている。これらを整理すると、「正義派」に対する作者の言葉は、

(1) 材料は、車夫から得た。

(2) 主題は、自ら正義を擔ふと自負して行動した人間が、正義の支持者という誇りを自ら段々誇張さして行つて、後で何んともなく報われない気がして淋しくなる、ということである。

(3) 自己評価は、短編らしい短編として愛している。

ということになる。

(1)の材料については、それ自体は問題のないことであるが、電車による事故には因縁がある。志賀はこの作を発表した約1年後の大正2年7月26日に、子供が電車にひかれかかったの乗り合わせていて目撃し、それを「出来事」という作品にして、その原稿の仕上がった8月15日、里見弴と散歩に出て、その帰りに山の手線の電車にはねとばされて大怪我をしたのであった。

(2)の主題は、前半はともかく、後半を、後で何んともなく報われない気がして淋しくなる、といっただけで十分かどうか、問題である。

この作は、年かさの男が人力車の〈泥よけに突伏すと声を出して泣き出した。〉というところで終わるのであるが、彼が泣き出すのは、その淋しさからだけではなく、明日からの食いはぐれが怖いからで、そしてその方がむしろ主な理由ではないか、と推定されるためである。

また、作品の興味の一半は、年かさの男、眉間に瘤のある若者、瘤のない若者の、三人三様の心情の変化にもあるとするならば、作者の言葉は、この作の主題の説明として、必ずしも十分であるとは言いがたい。これも検討に値いすることであろう。

(3)の自己評価の、短編らしい短編とは、どのようなもののことをいうのであろうか。

伊藤整も言うように、志賀の創作態度は、〈作り話を本質とする小説というもののフィクションの形式を軽視……〉している。したがって、現在短編小説に一般に求められるところの、

＜短編小説はそのとりあつかう主題すなわちテーマが明確でなければならず、効果が適切、印象が鮮明、全体的統一が厳密でなければならない……⁴⁾＞

というような考え方を、そのまま「正義派」に適用して評価することは、いかかかと思われる。志賀は＜リズム＞という題で、

＜芸術上で内容とか形式とかいふ事がよく論ぜられるが、その響いて来るものは、そんな悠長なものではない。そんなものを超絶したものだ。自分はリズムだと思ふ。響くといふ聯想でいふわけではないがリズムだと思ふ。

此リズムが弱いものは幾ら「うまく」出来てゐても、幾ら偉らそうな内容を持ったものでも、本当のものではないから下らない。小説など読後の感じではっきり分る。作者の仕事をしてゐる時の精神のリズムの強弱——問題はそれだけだ。⁵⁾＞

と書いているが、この「精神のリズム」というのは、小林英夫氏も言うように、＜作者の観察する対象それ自体のもつリズム＞で、＜彼が描くべく注視する瞬間の対象のもつリズム⁶⁾＞のことであろう。

これは、作者が対象を確実にとらえたときに生ずるものであり、できた作品は、書かれた内容と表現がぴったり一体となっているということかと思われる。「正義派」が志賀自身の示すこの条件に合致するものかどうか、主題・構成・表現（叙述）の各面から検討することにする。

主 題

志賀は「青臭帖」に、作者が材料に取り組むことについて、

＜小説の要素には作者から遊離した存在がなければならぬ。隅から隅まで作者が出てゐる事は自慢話をきくやうな感じがする。作者から独立、或ひは遊離したものがあり、それを確実に作者が捕へて書く。その時その小説は作者だけのものでない存在となる。

一方に又、これと反対の場合もある。作者の材料に対する批判がなさ過ぎて、如何にも頼りないものがある。いかにもうまく事柄が書かれてゐて、しかも作者の人間といふものは何処にも感じられない、かういふ小説も面白くないものだ。⁷⁾＞

と記しているが、この「正義派」の場合、どのように作者の人間が出ているか。矢崎弾氏は、＜自我への反省について、おそろしいほどの焦躁といらだちは、志賀直哉の私小説形式においてとくにめだつのであり、客観的な描写の作品には、その精緻な反省のきびしさは、観察の鋭敏さとはなつても、現象の真実の究明にたいしてはかならずしも執拗とはいへない。たとへば「正義派」において電車にひかれた女兒をめぐつての事件を、作者の正義心の昂奮の経過を描くことによつてとらへてゐる。正義そのものより、正義に湧きたつこゝろの羽搏きに作者の熱意はかたむけられてゐる。＞

と評しているが、志賀の不徹底な傾向は、既に「渡良瀬川鉍毒事件」にも見られる。

＜自分もこの演説会を聴いて随分亢奮した。そして兎に角被害地を見に行くといふことにした。ところが父は、見に行つてはいかぬといふのだ。理由は古河の家とは古い関係があつて、自家の者がさういふ運動に参加してゐる事が古河に知れたら、自分が迷惑すると云ふのだ。父とは色々な事で喧嘩をしたけれど、いちばんはつきり、ひどい喧嘩をしたのは此時だ。父は「古河は兎に角えらい人物だ」と云ふし、僕は「あれは悪人だ」と云つた。二人は茶の間で激論をやつたわけだが、その時祖父はそこに柱に倚りかかつて坐つてゐて、ただ聴いてゐるだけで、徹頭徹尾一言も云はなかつた。……(中略)……僕も祖父にはその事は一ト言も云はず了ひだつたが、祖母が間に入つて、僕はやはり行く事を止めた。そのかはり被害民に着

物やその他、大きい荷を造って送る事にして、一段落ついた。⁹⁾>

と、「稲村雑談」にあり、志賀の突つぱり」と「妥協」がよく表れている。また、敵役の父に対して、中立の祖父、仲介の祖母、対立する志賀の三人が、三様の相を見せている。

志賀の父が専務取締をしていた総武鉄道会社が政府に買い上げられ、慰労金？の分配で従業員との間に騒ぎが起こって、自宅の門の前にかげ合いに来た代表の男と談判した志賀は、金貨十圓（木賃宿なら一ヶ月くらはいは暮らせる金額）を与え、

＜自分は一人でやってゐるより、社会問題にした方がいいだらうと云つた。然し人のために働くから、といて妻を餓ゑさせて差支へないとは云へないだらうとも云つた。妻を食はずだけのことではやってゐて、やらなければだめぢやないかと云つてやつた。¹⁰⁾>

という話が、前述の話の後に出ているが、問題を社会に訴えるという一つの方法と、妻を餓えさせないという、行動者の基本的条件を提案している。

以上のような志賀の考え方によれば、「突つぱつて」も「食いはぐれ」をなくすには、適当に妥協するか、「社会問題」にしても、妻は「食いはぐれ」がないようにすることが、こういう問題の対処の仕方ということになる。しかし、「正義派」の三人の線路工夫は、その素朴さ、その知見の狭隘さにおいて、そのいずれの方策も、考えたり行ったりする人種ではなかった。ただ状況の展開するままに興奮して正義を敢行し、冷静に返って現実の厳しさに泣いた。

初め、三人の工夫は、女の子が轢き殺される状況を至近の距離で正確に目撃しており、母親の凄惨な様子も目にして、哀憐と同情を禁じ得なかつたであろう。そこへ会社のために（同時に自己のために）電車の監督が事実を歪曲化しようとするのを眼前で聞いて、思わず興奮して衆人環視の中で眉間に小さな瘤のある男が、「そら使つてやがらあ！」と云ってしまった。そして彼ら三人は相談して合意のうえ、証人に立ったが、積極的なのは瘤のある男であり、丸い顔の男は年かさの故をもって先頭に立たされたのであろう。何の記述もないあとの一人（瘤のない若者）は、それだけ消極的であつたと思われる。まことに三人三様である。

三人が証人に立とうとしたのは、置かれた立場と、自然な素朴な感情の高まりの結果であつた。突然の異様な状況の出現によって惹き起こされた興奮の仕業であつた。興奮が余りに強烈だつたため、会社と対立する不利や心配も過少にしか感じなかつたであろう。その対立の不利感や心配が「食いはぐれ」の恐怖につながるまでには、若干の時間が必要であつたのである。

彼らは確かに正義派ではあつたが、確固たる信念をもって、それを遂行しようとするものではなかつた。己れの行為に酔い、他人の賞賛を期待し、自慢し、誇張し、言い触らしたい凡人であつた。＜正義を擔ふと自負して行動した＞ことには間違いないが、その「自負」たるや、興奮によって支えられた、一時的な、根なし草のそれであつた。

＜正義の支持者といふ誇りを段々誇張さして＞というのは、証人に立ったということ、牛肉屋の女中共を前に、＜何しろお前、頭と手とがぢぎれぢまつたんだ。それを見ると其場で母親の気はふれぢまふし……＞と、大げさに言ったり、＜ここらは^{あした}明日の新聞にどう出るかね＞と、新聞を引き合いに出して、自分たちの行動を大事件の立役者のように話したりすることなどであらう。これはもう、正義の主張ではなく、事故を楽しんでいるものといつてよい。あるいは酒に助けを借りての興奮の盛り返しで、「食いはぐれ」の恐怖感を押さえつけるための誇張であつたともいえるであらう。

問題は、後半の＜後で何んとなんく報はれない気がして淋しくなる＞という点である。作品自体に、署から現場への路上で、彼らが＜何んとなんく物足らない感じ＞がし、＜不当な侮辱＞を感じ＜不満＞を感じ始め、＜情ないやうな、腹立たしいやうな不平＞を禁じられなかつたと記さ

れている。更に牛肉屋の二階では〈元の不満な腹立たしい堪へられない心持に還ってゐた。〉と明記され、年かきの男は一番興奮して〈会社の仕事で食つてゐるには違ひない。然し悪い方は悪いのだ。追い出される事なんか何だ。そんな事でおどかされる自分達ではないぞ。〉と、強がって大声で罵るのであるが、これは明瞭に恐怖感からの叫びである。だから彼は、遊廓へ向かう俥の上で、〈死んだやうになつて〉以後、本音を表す人間となつて〈啜泣〉き、〈泣きながら〉ケコミに立ち上がりそうにし、最後は〈声を出して泣き出〉すのである。

後半は、〈報はれない〉とか、〈淋しい〉とかいう段階のことではなく、〈食いはぐれ〉の恐怖である。仮りに志賀が、そのような意図で書いたのではない、と言っても、主題は作者の意図のことではなく、作品に表現されたその作品自体の中心的意図なり、思想なり、のことであるから、作者の言葉や説明は、参考とはなつても、必ずしもその作品の主題を決定するものではない。したがつてこの「正義派」の主題は、「一時の興奮で立場を思わず事実を証言した線路工夫たちが、興奮が裡めていくにしたがつて食いはぐれが怖くなり、三人三様に、諦めたり、突っぱり続けたり、泣き出したりするまでの心情の変化」というようなことであろうか。と同時に、「正義に対する人間の対応は、大体このようなもの」と、大方の凡人の心内の実態を描き出そうと試みていることも、看過できないところであろう。

構 成

志賀の作品の多くは、周知のように、その構成は山が乏しく、最後のドンデン返しもなく、時間の順序で描写が続く、といわれている。志賀自身も「杳掛にて」の中で、〈私は夏目さんの物でも作者の腹にははっきりある事を何時までも読者に隠し、釣つて行く所は、どうも好きになれなかつた。¹¹⁾〉と書いている。

この「正義派」の構成も例外ではない。まず冒頭の文で、女の子が轢き殺されたことを述べ、そのあと詳しい描写を行っている。配列は時刻の順序で、〈夕方〉事故が起き、〈夜も九時に近く〉警察署を出て、牛肉屋で再び三人だけになるのは「十二時に近かつた。」のである。

志賀は「青草帖」に

〈一つの小説を書く為には散々むだを自分は書く。そのむだとは、内容そのものには必然的な関係を持つものであるが、小説が一つの芸術として、まとまる為めには不必要なものなのだ。

それを最初から避けるといふ事は、余程調子がよくないと出来ない。そしてついそれを書いて了ふと、それが全体の調子を破る。しかも書かねばそれだけが、作品からなくなり不完全になるかといふに、ならない。それだけのものは自然に何処かに（恐らく行と行との間に、或ひは字と字との間に）含まれねばならぬものだ。書かずに自然に含まれる。これは、うまく行けば自然に出来る事なのだ。¹²⁾〉

と記している。うまく行くときは別として、むだを書いて、それを温めたり推敲したりしているうちに、作品が出来ていく、という感じである。「正義派」も一応このプロセスでできた。

この作品は、大正元年（1912）9月1日発行の『朱槲^{ザンボク}』第二卷第九号に発表されたものであるが、同年8月25日の日記に、〈あけ方、とうとう正義派を書き上げる。悪い小説とは思はない。¹³⁾〉と、自信のほどを見せている。さかのぼつて同年5月2日の日記には、〈夜少し仕事をした。（興奮といふ題の）¹⁴⁾〉とあり、5月5日に〈「興奮」といふ題の小説を書き上げた。¹⁵⁾〉と記されている。そして5月17日の日記に〈「線路工夫」を少し書いて見た。¹⁶⁾〉とある。

記事の内容から考えると、「興奮」が「線路工夫」と改題されたようである。次は5月28日の日記に、〈夜「正義派」の2nd Impressionを書き了つた。感心すべきものではない。¹⁷⁾〉とあ

って、「線路工夫」が更に「正義派」と題名を変えられたものと考えられる。そして最後は8月15日の日記で、〈ザンボアの原稿をひき受けた。「正義派」を書き直して出さうと思つた。¹³⁾〉とあって、前述の8月25日の日記に続くのである。

これらの経過から、この作品の出来ていく過程を大胆に推定してみると、

- (1) 車夫から材料の話を書く。その内容は恐らく、事故の概要と、監督の事実の歪曲化と、線路工夫が証人に立ったことと、俥に乗った二人の工夫の様子などが主なものであろう。
- (2) そこで作者は、線路工夫の一連の行動の原点を「興奮」と決めて、事故現場で興奮した工夫を、まず証人として警察署に赴かせ、署を出てから牛肉屋までの路上における興奮とその沈静の交替。牛肉屋での興奮の一時的盛り返しとその反動の強がりやを並べ、最後は本音を丸出しにした泣き声で終わる、という心情曲線を構想したのではあるまいか。
- (3) しかし、この興奮の心情曲線だけでは、車夫の話のおもしろさの一つと思われる、年かきの男が泣き出し、若い男が「もういいやい、もういいやい」と大声を出すという二人の違いが出て来ない。そこで瘤のない男を新たに追加して、三人三様の性格を設定した。
- (4) それにしても、これだけでは、読者に興奮の変化による興味や、中心人物との性格の共有による親近感があっても、考え込ませる問題がない。考えてみれば、三人の行動内容は正義の素朴な実践である。正義の問題は志賀自身少年時から、その実生活で、しばしば苦しみ考えてきたことである。そこで「正義」と「食いはぐれ」を両極にして旧稿を改めた。
- (5) ところでよく読めば、「興奮」を原点として書いた部分の中に、「正義」を中軸として見ると「むだ」があり、三人の工夫の「性格」の書き分け方にも問題が残る。5月28日の、〈……感心すべき物ではない〉は、或いは三系列を「むだ」なく統一し終わるまでの、うめき声であったかも知れない。
- (6) 最後の8月25日の日記に、〈悪い小説とは思はない。〉とあるのは、まずまずの出来だと自認したということであろう。

三系列のうち、「興奮」の系列では、路上の部分に事が多過ぎる感があるし、「正義」の系列では、警察署での彼らの成功感がうまく出ていないように思われる。しかし、後から書き加えられたと推量される、女の子の轢き殺される前の正確な描写や、今日の精神医学書に記載されているような母親の悲惨な姿は、正義感を誘発する必然の要因として、自然で実感がある。

次に、形態の面から構成を見ると、全体は〔上〕と〔下〕に分かれ、〔上〕は行あけによって3場面に細分され、①の事故の状況が「起」、②の監督の事実の歪曲化が「承」、瘤のある男の高い声が「転」、③の証人の申し出が「結」、となっていて、場面ごとの印象を鮮明にするのに役立っている。〔下〕は形式段落のほか、行の区分もないが、自然に起承転結が含まれ、綿々と続く三人の心理を描写するのに適合した形式である。

既述のように配列は時間でできているが、事故現場→警察署→路上→事故現場→牛肉屋→路上→事故現場→(遊廓)と、空間の方は、事故現場が始・中・終と3回繰り返され、そこを通過するときの工夫たちの心情の変化を対比して鮮明にしている。演劇性を導入した、巧みな構成といえよう。

なお、視点はいわゆる三人称全知式であるが、工夫に即しての言動の客観的な描写が多く、実感をそこなわれないように配慮されている。

表 現

1. 志賀直哉の文章の特徴と「正義派」

志賀の文章について小林英夫氏は「文体論から見た志賀直哉」で、

<(1) 拘泥、興奮、感じた、思った、などの気分描写の言葉が多い。

(2) 同一語のおびただしい反復を、作者は気にしてゐない。

(3) 物のリズムを重視することから、文章のテンポが遅い。

(4) 文が短い。ぼつりぼつりと切れた単文の集積から出来てゐる。

(5) 主辞内頭文とでもいふべく、一文の主辞をあらはに表明せずとその意味を文脈に依存せしめるやうな文が多い。

(6) 文と文の接続詞はたくさんあるのに、ほとんど意識されない。それは「然し」や「が」のやうな対意的な助詞よりも、「そして」のやうに、おとなしい、列挙又は従意の接続詞の方が利いてゐるからである。

(7) 子供のやうなやり方で、前文に使つた名詞を後文で平気に反覆する。

これらの特徴が氏の文章に素朴と淡白の性質を賦与するのだ。(要約)¹⁹⁾>

以上のことは、「正義派」の文章にも大体該当していて、主題や路線工夫の素朴な人柄のイメージづくりに不可欠の要因となっている。まず、

(1)(2)(3)の例として、

<然し夜の町は常と少しも変つた所はなかつた。それが彼等には何となく物足らない感じがした。背後から来た俤が突然叱声を残して行き過ぎる。そんな事でも其時の彼等には不当な侮辱でもある様に感ぜられたのである。歩いてゐる内に彼等は段々に愉快な興奮の褪めて行く不快を感じた。そしてそのかはりに報はるべきものの報はれない不満を感じ始めた。彼等はしつかりなしに何かしやべらずにはゐられなかつた。その内にいつか彼等は昼間仕事をしてゐた辺へ差しかかつた。丁度女の児の轢き殺された場所へ来ると、それが常と全く変らない。只の其場所にいつか還つてゐた。それには彼等は寧ろ異様な感じがしたのである。>

9文中、「感〜」で終わるのが5例で頻度55%、「彼等」は6例で66%である。「彼等」を取り去っても、「感〜」を他の言葉に置き換えても、意味は十分通じる。しかしそれでは、彼等の心を注視し、これを強調することができない。対象に全心を傾けて溶け入り、感得するままに表現したときに、彼等の心のリズムが読者の胸に響いてくる。

(4)の文の長さも大体当たっている。

(5)の例としては、

<監督は其間で色々とりなさうとしたが、三人はそれには耳を一切貸さなかつた。そして時々運転手の方を向いては「全体手前がドヂなんだ」とこんな事をいつてけはしい眼つきをした。>

がある。「全体手前がドヂなんだ」と言ったのは、うっかり読むと監督かと思われるが、監督が運転手にそのようなことを言うわけがない。主辞「三人は」が「時々運転手」の前に内在的に顕れている文、と考えることができる。

(6)は、この作品は会話文を除いて全部で118文あるが、接続詞は「そして」が7例、「そこで」が1例、「然し」が4例、「が」「ところが」が各1例で、従意のもの8例、対意のもの6例である。接続詞は計14例あるから、約12%弱で、8文中1回しか用いられていないことになる。接続詞の用法については、小林氏の所説は当てはまらない。

(7)の例としては、

<何処からともなく巡査とか電車の監督などが集つて来て、人だかりを押し分けて入つて来た。巡査は大きな声をして頻りに人だかりの輪を大きくした。矢張り人だかりの輪の内でも或

監督がその運転手にこんな事を訊いて居た。>

連続する3文の中に、3度「人だかり」という名詞を使っている。第2文、第3文のは、代名詞で置き換えることができるのに、敢えてこのような使い方をしてるのは、「人だかり」という名詞を畳み重ねることによって、「人だかり」の実感を出そうとする工夫であろう。

2. 「た」どめの文末表現

志賀の文章の大きな特徴の一つとして、「た」どめの文末表現が多いことは有名であるが、この「正義派」もその通りで、全文118のうち、107例がそうで、現在形は11例に過ぎない。その現在形というのは、<……殺しはしまいと>のような倒置法が1例、<のだ><のである>のような、理由の説明や強調などが4例、<背後から来た俤が突然叱声を残して行き過ぎる。そんな事でも……>のような例示1例のほか、①<会社の仕事で食つてゐるには違ひない。>、②<然し悪い方は悪いのだ。>、③<追ひ出される事なんか何んだ。>、④ <そんな事でおどかされる自分達ではないぞ。>、⑤<いつの間にか啜泣いてゐる。>などがある。

このうち、①②③④は、それぞれ一文の形をなして独立しているが、これは、かぎかっこをつけて1つの会話文として一括することができ、次に続く<たわいもなく独りこんな事を大声で罵つてゐた。>の<こんな事>の内容となるものである。したがって①②③④は、かぎかっこそついていないが、地の文ではないと考えることができる。残る⑤は、いわゆる歴史的現在であるが、ここはむしろ「啜泣していた。」とでもしてしまった方が、文体的にはすっきりするようにも思われる。

「た」どめの文末表現は、言うまでもなく、各文ごとに独立性を与え、印象を明確にし、これを継続的に多用することによって、独特の強いリズムを生ずる。しかも、この「正義派」では、その中で「つた」が37例、つまり全体の½もあって、一段と調子を強めるのに効果を挙げている。これらの文末表現は、素朴で実行力のある線路工夫を語るにふさわしい文体の基礎であるといえる。

3. 語句

1の(2)の場合を除いて、「正義派」で注目される語句の用法には、次のようなものがある。

(1) 「直ぐ」の使用が全文章中11回ある。

- ①<永代を渡つて来た電車が橋を渡ると直ぐの処で……>
- ②<第二の救助網は鼠落しのやうな仕掛で直ぐ落ちる筈だから……>
- ③<直ぐ人だかりがして……>
- ④<直ぐ電気ブレーキを掛けたが、……>
- ⑤<女の児が車の直ぐ前に飛び込んで来たので……>
- ⑥<直ぐ電気ブレーキを掛けさへすれば……>
- ⑦<三人は席を決めると直ぐ……>
- ⑧<そして直ぐ四五人が彼等を取りまいて……>
- ⑨<瘤のある若者が直ぐ応じた。>
- ⑩<二人は直ぐ側の帳場から……>
- ⑪<これが直ぐ台になつて……>

「直ぐ」には、時間と空間の両様の意味があるが、①⑤⑩だけが空間で、他はすべて時間である。このように「直ぐ」が全文章中に点在しているのは、勿論意図的で、使用されている本来の意味のほかに、この事件の焦点であるところの「電気ブレーキを掛けたのは、直ぐかどうか」を何度も連想させるとともに、線路工夫たちの「直ぐ」な気質を暗示しているのであろう。

そして、全文章の雰囲気は無意識のうちに統一する役目を果たしている。

(2) 「興奮」

- ①<工夫は或興奮と努力とを以つて……>
- ②<少し離れた処で興奮した調子で……>
- ③<一種愉快的興奮が互の心に……>
- ④<愉快的興奮の褪めて行く不快……>
- ⑤<年かきの男は一番興奮して来た。>

使用頻度は5回であるが、テーマの中心語を生まの形で繰り返すのは、むきだしの感をまめがれないが、素朴な線路工夫の場合、適切であるといえる。

(3) 「～やうな(に)」

例を省くが、これは13例あり、「比喻」と「様態」がほとんどで、例示は1回、不確実な断定は1つも無い。率直で明瞭な文章であるからであろう。

(4) その他

- ①<女の児を轢き殺した。……女の児の体は……もう轢き殺されて居た..>
- ②<巡査は大きな声をして頻りに人だかりの輪を大きくした。>
- ③㉗<「それより俺、腹が空いて堪らねいやい」>
 - ①<「悪くすりや明日ッから暫く食ひはぐれもんだぜ」>
 - ㉘<「悪くすりやどころか、それに決まつてらあ」>
- ④㉗<「なんせ一杯やらうぜ」かう年かきの男が云つた。>
 - ①<其処の大きい牛肉屋に登つた。>
 - ㉘<中には二人で……仔細らしく小声で話合つてる客が……>
 - ③<三人は席を決めると直ぐ……>
 - ㉙<そして直ぐ四五人が彼等を……>
- ⑤㉗<女中共は一人去り二人去りして……>
 - ①①<彼等は又三人だけになつた。>
- ⑥<小言をいひながら怪しい足取りで其牛肉屋の大戸のくぐり戸を……>

①は能動と所動で対照の効果を挙げ、②は「大きい」を繰り返して「大きな」感じを出す。③は㉗の「腹が空いて」から④の「食ひはぐれ」を連想させて引き出し、④の「悪くすりや」は㉘の「悪くすりや」を引き出ししているが、㉘の意味は勿論「悪くすりや食ひはぐれ」である。④の①の「大」は㉘の「中」「小」とワンセットとなっており、㉗の「一」、㉘の「二」、④の「三」、㉙の「四五」は、数の順序のとおりである。⑤の㉗の「一」と「二」、①の「三」も数の順である。⑥の「小」は「大」と一対になっている。いずれも素直な修辞である。

4. 文の照応

前の文と後の文とが照応している例はたくさんあるので、そのうち2例を挙げるにとどめる。

- ①㉗<失神したやうになつた母親……>

④<その場で母親の気はふれちまふし……話はいつの間にか大変大袈裟になつていた。>

- ②㉗<「いつまでいつたつて、悪い方は悪いんだ。」……「君等も会社の仕事で飯を食つてる人間だ。」>

④<会社の仕事で飯を食つてるには違ひない。然し悪い方は悪いのだ。>

(1)の④が大袈裟な話であることがわかるのは、三頁前に㉗があるからである。(2)の④が年かきの男の一段と悲痛なうめきと聞こえるのは、三頁前に㉗があるからである。

5. 声調の描写

声調の変化を軸にした会話の描写が、「上」と「下」に各一場面ずつある。

「上」の場面では、<巡査は大きな声を>出し、運転手は嘘を言うために、<その声には妙に響がなかつた>り、<声がしやがれ>たり、監督は運転手に<示談の場合大変関係して来る>ことをなるべく周りの人に聞かれないように教えるため<急に声を落し>たり、<又普通の声になつ>たりする。その結果、線路工夫が、<そら使つてやがらあ、>と<高い声を出す>

「下」の場面では、<掃いたやうな大通りは静まりかえつて>いる深夜、瘤のある若者の<大声に話す声は通りに響き渡つて>いる。そして、遊廓へ向かう途中の俵の上で<死んだやうになつてゐた年かさの男は>現場へさしかかると<一寸降してくれ>と言って<いつの間にか啜泣してゐる。>瘤のある若者が<大声で制>する。<「エエ、一寸降してくんな」こういつて泣きながら、ケコミに立上りさうに>する。最後は、<声を出して泣き出>す。

いずれも巧妙な声調変化の描写で、視覚と聴覚を同時に刺激して実感を強くさせる。

6. 外界と心情

(1)<明るい夜の町へ出ると彼等は何がなし晴れ晴れした心持になつて……>

これは、外界と心情が一致している例であるが、この「正義派」では、逆に外界と心情の不一致を克明に描写して、線路工夫たちの異常なほどの興奮を伝えている。例えば、

(2)<——然し夜の町は常と少しも変つた所はなかつた。それが彼等には何となく物足らぬ感じがした。>

(3)<丁度女の児の轢き殺された場所へ来ると、そこが常と全く変らない、只の其場所にいつか還つてゐた。それには寧ろ異様な感じがしたのである。>

が、それである。また、心情を外界に投影した次のような例もある。

(4)<イヤに生若い新米らしい巡査がツンと済まして立つてゐるのを見た。>

(5)<巡査の方を振りかへって見た。其の時若い巡査は怒つたやうな眼で此方を見送つてゐた。>

7. 象 徴

「上」の末部に、

<女の児を轢いた車は客を後の車に移すと、満員の札を下げて監督の一人が人だかりの中を烈しくベルを踏みながら其儘本所の方へ運転して行つた。其側だけ六七台止つて居た電車が順々に或間隔を取つてそれに従つて動き出した。>

<あと誰かと云ふ時に少し離れた処で興奮した調子で何か相談して居た前の三人の工夫が、年かさの丸い顔をした男を先にして自ら証人に立ちたいと申し出て来た。>

電車が事故車を先頭に六、七台烈しいベルをならして本所の方へ向かうのと、線路工夫が年かさの男を先頭に三人興奮して本署に向かうのとは、電車と人間とが異なるだけである。そしてこの時、彼らはまだ、電車と同じように片側を通過していたのである。(証言の自由はあった)

<大戸のくぐりを出た時にはもう余程晩かつた。何方にも電車は通らなくなつてゐた。>

晩くなって両側とも止まったのは電車ばかりではなかつた。二人の線路工夫は、進むも退くも両側とも閉ざされて、格納された事故車のような心情にならざるを得なかつたのである。

む す び

「正義派」に対する志賀の言葉についての考察は既に述べた。短編小説としての価値はどうか。志賀自身の言う<読後の感じ>に<作者の仕事をしてゐる時の精神のリズム>が強く伝わってくるか、どうか。この「正義派」は確かにリズムは強いが、そこに感ぜられるも

のは、いわゆる感動よりも、興奮の褪めていく過程に起こる心情の変化への興味と、読者自身、正義への対応について改めて考えさせられることが、中心であるように思われる。

近代の短編小説に要求される、主題の明確、効果の適切、印象の鮮明、全体的統一の厳密という側面から見るとどうか。種々の見解があるろうが、主題はやや明確性を欠き、全体的統一の厳密さも僅かながらむだを排除し切れない憾みがある。しかし効果は適切、印象また鮮明で、正義の実行の難しさを読者の胸にひびかせる。短編として愛している人は多いと思われる。

参 考 文 献

- 1) 志賀直哉：志賀直哉全集，8，5，岩浪書店（1974）
- 2) 志賀直哉：前掲書，189
- 3) 伊藤 整：文芸読本志賀直哉，31，河出書房新社（1976）
- 4) 元田修一：短編小説の分析と技巧，1x 開文社（1979）
- 5) 志賀直哉：志賀直哉全集，7，8
- 6) 小林英夫：日本文学研究資料叢書，127 有精堂（1971）
- 7) 志賀直哉：前掲書，7，38
- 8) 矢崎 弾：日本文学研究資料叢書，34
- 9) 志賀直哉：志賀直哉全集，8，51
- 10) 前掲書，54～55
- 11) 前掲書，3，433
- 12) 前掲書，7，39
- 13) 前掲書，10，628
- 14) 前掲書，582
- 15) 前掲書，583～584
- 16) 前掲書，588
- 17) 前掲書，592
- 18) 前掲書，624
- 19) 小林英夫；日本文学研究資料叢書 123～130
- 20) 「正義派」の引用文は志賀直哉全集2に拠る。